

# 贅嫁と白蛇の恋紡ぎ

響 蒼華 Aoka Hibiki



アルファポリス文庫

序章 大蛇と花嫁

月が中天に差し掛かる刻。

森に分け入り程なくして辿り着く祠に一人の娘の姿があった。

月の光を受けて哀しいほどに輝く精一杯に贅を尽くした装束は、本来であれば嫁ぐ女が纏うものである。

土地において花嫁衣装と呼ばれる衣を纏って、娘は薄暗い森の祠にいた。

おおよそ山歩きには不向きな衣装の娘をここまで導いてきた者たちは、それぞれに形ばかりの感謝を口にしながら、逃げるように立ち去った。

動物の鳴き声すら聞こえない暗い森の祠にて、娘は息を飲み、一人待ち続けていた。心の中にて嘆息しながら見送ったのは、もう随分前であるような気がする。

だが今、その場にいるのは娘だけではない。

深く頭を垂れひれ伏す娘は、自分の前に佇む人影があるのを感じていた。

いや、それを『人』の影と表しているものか。

周囲の地面を這いずる巨大な何かがいる気がする。目の前にいるであろうもう一人へのおそれが作り出した、幻聴のようなものかもしれないが。

娘は震えを必死に押し隠し、平伏している。

その周囲に、風が激しい音をたてながら吹きすさぶ。

古く、建付けの悪い祠など、吹き飛んでしまうのではないかと思うほどの風だ。寒いのは気のせいではないだろう。

不可思議の気配を感じる力などないはずなのに、風が触れた肌から温度が奪われていく。身体の芯にまで冷たさが沁みとおり、骨の髄から熱が失せていく気がする。

あれほど強く心を占めていた、憎しみや怒りが凍りついていく心地がする。

怖い。指先に至るまで恐怖が支配していく。

叶うならば、動きにくい衣など脱ぎ捨ててこの場から去りたい。背を向けて逃げ出した。

しかし、それだけはしてはならない。

なぜこの場に自分がいるのか、なんのためにここに来たのかを忘れてはならない。

今日まで、皆の役に立たずに生きて来て、ようやく報いることができるのだ。

役目を思い出せと、心の中で己を叱咤していたときだった。

「あなたが、花嫁……か」

冷たく固い雰囲気を持つ、淡々とした声音で言葉が紡がれた。

娘の肩が目に見えて跳ね上がるが、悲鳴だけは必死に堪えた。

相手の機嫌を損ねるわけにはいかない。少しでもそれに繋がる行動は絶対にできないのだ。

応えないままという訳にはいかないと、娘は顔をあげて口を開こうとした。

だが、相手を瞳に映した瞬間、目を見開いて凍りついたように動きを止めてしまう。立っていたのは、這いずる何かではなく、一人の青年だった。

すらりとした均整の取れた体つきの長身の青年は、感情を窺わせない眼差しを娘に向けている。

ただ『普通』ではなかった。

青年は、あまりに美しすぎた。

魂を掴んで揺さぶるほどに、おそれと呼び覚ますほどに、尋常ではなく美しかった。

月の光を受けて煌めいて見える白銀の髪も、磨かれた玉のように美しい切れ長の瞳も、何もかも。

名工の手により一つ一つが絶妙に配置されたような、怖いほどに整った顔立ちの青年。

ああ、このひとが、と娘は心の中で呻いた。

青年は、どう見ても人間ではない。

尋常ではない伶俐な美しさが、頬に存在する鱗が、紅い瞳の虹彩が、青年が人ならざる者であると告げている。

心を掴み、魂を捉えて離さないほど美しい青年に、しばし見惚れるように言葉を失っていた娘が不意に顔色をなくす。

不躰に見つめてしまったと気づいて、娘は慌てて元の通りに平伏した。そして、幾度か息を吸って吐いてを繰り返し、勇気を振り絞る。

「瀬皓の長が娘、初穂でございます」

娘——初穂は、震えを必死に抑えながら、楚々とした仕草で手を突き、頭を垂れながら名乗る。

土地の長の娘にふさわしく、けして父祖の名を汚さぬように。

身に望まれた役目を果たすため、必死に精一杯淑やかに、それでいて毅然とした声音にて初穂は続ける。

「御身のもとに、捧げ物として参りました。何卒、我が身をもつて……」

頭を垂れたままの初穂には、今相手がどのような様子であるかは分からない。風が祠の中を過ぎゆき、吹きすさび続けている。

少しでも相手の機嫌を損ねたら、ここに初穂が来た意味がなくなってしまう。

そればかりではない、瀬皓の村の人々に累が及ぶかもしれない。今よりも尚酷く性質の悪い災いが村を襲うかもしれない。

血の気が失せていくのを感じながらも、それでも必死で初穂が次の言葉を口にしようとした瞬間、荒れ狂うようだった風が、ぴたりと止んだ。

「ようこそ。待っていましたよ、私の花嫁さん！」

「……………え……………」

初穂は、すぐには理解できなかった。

花嫁さん、と言う声音があまりに穏やかで明るくて。先程の冷たさを感じる言葉とはあまりにかけ離れていて。

初穂は、弾かれたように身体を起こして顔をあげてしまう。

見上げた眼差しの中には、先程と同じように人ならざる美貌の青年の姿がある。

だが、その端正な顔に浮かんでいるのは、喜びに溢れたうれしそうな笑顔だった。優しく温かい眼差しを向ける、鱗を持つ青年を見て、初穂は啞然としてしまう。

強張った顔で目を見開く初穂の眼差しを受けながら、青年は人の良さげな笑みを浮かべていた。

この青年が、瀬皓の山に住まう人ならざる者で間違いなければ、初穂は、たしかに

この青年に『花嫁』として捧げられた身である。  
 そう、怒りに狂い村に災いを起こしている恐ろしい山の白き大蛇に。

『花嫁』という名の『贄』として――

## 第一章 瀬皓の災い

初穂の脳裏を巡るのは、過ぎし日の光景である。

瀬皓は、帝都から遠く離れた、山間の村だった。

周囲を切り立つ山々と溪谷に囲まれ、半ば隔絶された、陸の孤島とも呼べる土地である。

外界と村を繋ぐ唯一の道は、谷沿いの厳しい細い道の一本だけ。

そこには常に見張りが立ち、人の出入りを厳しく監視している。村の長であり瀬皓一帯の土地を有する地主、初穂の父の命によるものだ。

初穂の父は、村への人の出入りを極度に嫌う。

そのせいか、瀬皓の村は時の流れから取り残されている趣があった。

時折、外から嫁入りがあったり、逆に嫁いでいたりはあるが、それも多いわけではない。

村の人間にとつては、帝都と呼ばれる場所にて政が行われていることも、新しき事物も思考も何もかも、どこかおとぎ話のような現実味のないもの。

ただ肩を寄せ合って助け合い、畑を耕し、細々と暮らしていく。それが村に暮らす人々にとっての世界のすべてだった。

その日、村の有力者たちが長の屋敷にて会合を開いていた。

広間で男たちが深刻な面持ちで話し合う中、初穂は次の間に控えていた。

初穂は、地主である嘉川家の長女である。

流れるような艶やかな黒髪を結び、瞳は宵の空を思わせる漆黒である。

いささか青白く見える肌を纏う着物は、帝都の令嬢たちに比べれば貧相であろうが、村の女たちが望んだとて得られない、地主の家の面子を保つにふさわしい上質なもの。絵から抜け出てきたのではと錯覚させるような、鄙の地には稀な美しい娘と人々は囁きあう。

しかし、とうに嫁いでいておかしくない年まわりであるというのに、初穂は未だ嫁がずにいた。

理由は単純だった。

初穂が、酷く病弱に生まれついたからだ。

二十歳までは生きられないだろうと医者に告げられていた。

事あるごとに病を患い、此度はもう駄目だろう、と言われながら辛うじて生を繋ぎ

続け、気づけば行き遅れと言われる年頃までは生き延びてしまっていた。

いかに美しくあろうと、嫁した女は一人でも多く子を為すのが美德とされる土地において蒲柳の性質は倦厭される。

故に、嫁にと望む者が現れないのである。

妹たちは既に嫁ぎ母となっているが、初穂には未だ一つの縁談もない。

かつてはなんとか縁談をと思案していた父だったが、やがて無理に嫁がせるのを諦め、屋敷にて穏やかに暮らすよう言ってくれた。

終わる日がそう遠くないのを感じながら、初穂は父の言いつけに従い、静かに暮らしていた。

女中に新たな茶の采配を指示すると、初穂は再び先程までと同じように控える。

襖の向こう側で重々しく交わされる言葉は、まだ終わる気配がない。

(無理もないわ……。それだけの問題ですもの……)

近年、瀬皓の村は相次ぐ災いに見舞われていた。

ある日、たくさんの川魚が腹を上にして浮いているのが見つかった。

それを皮切りに、異変は起きた。

次に、畑の作物や村周辺の植物が枯れ始めた。

恐れる人々に追い打ちをかけるように村を襲ったのは、謎の疫病だった。

手足が震えるようになり、立っていられなくなる。そして言葉を失い、錯乱し、死に至る者もあった。

しかも、災いはそこで終わらない。

一人、また一人、と消息を絶つ村人が現れ始めたのだ。それこそ、神隠しにでもあったように、本当になんの前触れもなく消えてしまう。

村外に出たとは考えられない。

見張りたちは見ていないと口を揃えた。

相次ぐ災いに人々は震えあがり、怯えた眼差しを向ける。

それは、言い伝えにより立ち入りが禁じられた山だった。

『山の大神の怒りだろう……』

『山のあやかしが、村を祟っておるのだ……』

古くから、その山には強大な力を持つあやかしが住んでいる、と言われている。獐で巨大な白蛇は、山へ人が立ち入ると怒って暴れ回り、人を喰らう。

それ故に山への立ち入りは禁じられ、破つたものは罰を受けていた。

人々は、大蛇が何かの理由で怒り村を滅ぼそうとしているのだと、喰うために人を攫って隠しているのだと震えていた。

重苦しい空気が立ち込める中、上座に座っていた長——初穂の父は大きく嘆息する

と、口を開いた。

『贅を捧げて、許しを請うしかあるまい』

居並ぶ人々がどよめく。

しかし、否定の気配はない。

恐らく同様の考えだったのだから。

村人たちの間でも、密かに囁かれるようになっていた。山の大神の怒りを鎮めるために、贅を捧げるべしと。

誰も異を唱えない空気の中、父の傍らに控えていた若い男が驚愕の叫びを上げた。

『この明治の世に贅など……！ 本気でそのような迷信に従うつもりですか……！』

叫んだのは、父に仕える、山根という下男だった。

山根は、この村においてほぼ唯一と自負している『外の世界感覚を持つ人間』である。

元は帝都で暮らしており、帝大で学ぶ学生であったという。

しかし父親の事業が傾いたために一家離散の憂き目に遭い、老いた母と共に血縁を頼って瀬皓にやってきたらしい。

初穂の父のもとで下男として働くようになったが、未だに村人からは余所者と敬遠され、父からは酷い扱いを受けている。

山根は贄を捧げるなんてあまりに非科学的であり、なんの解決にもならないと必死に訴えた。

だが次の瞬間、鈍い音が響き、続いて何か倒れるような大きな音がした。

『うるさい！ 黙れ！ この帝都かぶれめ！』

父の怒号が響き、驚いて視線をそちらに向けると、立ち上がり杖を手にした父と、倒れ伏した山根の姿がある。

あの杖で山根を打ち据えたのだろう。

だが、哀しいことに誰も驚いてはいない。

むしろ致し方ないといった空気が漂い、父に逆らった山根を非難する眼差しすらある。

普段は落ち着いた統率者である父の、逆鱗に触れる唯一のものが『帝都』なのだから。

そこに由来する考えを口にすれば、どうなるかなど分かっているのに、と。

『開化だのなんだのと浮ついた、帝都の汚らわしい考えをそれ以上口に出してみる！ 親族ごと村から追出すぞ！』

父は怒りに顔を真っ赤に染めながら、尚も山根に向かつて杖を振り下ろす。そして、苦痛の呻きが徐々に弱々しくなるまで打ち据え、相手の反論がないのを確認してから

もう一度座につく。

黙したまま場を見つめていた者たちが、再び口を開く。

『しかし、贄を捧げると言っても……。誰を……。』

相応の価値がある贄でなければ、更なる怒りを買うかもしれない、とある者が言う。古くからの風習に倣うのであれば贄は乙女である必要があるが、ふさわしい娘は里にいたのだろうか、とある者が首を傾げる。

一同は、難しい顔をしたまま揃って黙り込んでしまった。

新たな茶を供した女中たちも、平素の顔を崩さぬようにしながら、うつむきがちに何かを思案している。

ああ、と初穂は心の中で呻く。

背に、肩に、感じる。

重くのしかかるものを。

言葉によらない、明確に訴える意思を。

答えなどもう決まっているのだ。

そして、それを彼らに言わせてはならないことを知っている。

告げるのは、初穂でなくてはならない。

それが、初穂の正しい選択なのだ……

村の有力者たちが揃って口を閉ざす重苦しい沈黙の中、初穂は決意の表情で、楚々とした仕草をもって進み出た。

『私が参ります』

初穂は畳に指を突いて頭を垂れる。

『初穂!』

娘の申し出に、上座の父が目を見張った気配を感じた。その場にいる面々も、一際大きなよめきをあげる。

けれどその声は、どこか予定されていた事柄がつつがなく行われたような、不思議な雰囲気も帯びていた。

『長の血筋に生まれながら、嫁ぐこともできず、お父様のお役に立てずにおりました。この身がお父様、ひいては村の皆様のお役に立つというならば』

思いもよらぬほど、すらすらと淀みない言葉が、初穂の口から紡がれる。何度も考えぬいた口上を述べていると、滑稽な芝居の演者にでもなったようだ。

けれど、それを露ほども感じさせぬたしかな口調で、初穂は言い切った。

迷いなく告げられた言葉に、動揺した様子を見せていた有力者たちは感嘆の息をあげる。

『さすが初穂様……』

『恐ろしいだろうに。自ら贅に名乗り出るなど、なんと健気な……』

次々とあがる声を、初穂は慎ましく沈黙したまま聞いていた。

恐ろしくないわけではない。

けれど、それ以外を選べないのだ。

どうやって生きてきたか考えたなら、これ以外に選択肢がない。

決意を告げたまま言葉を待つ娘へ、父は大仰に嘆息して見せると、表情を歪め、苦い声音で問いかけた。

『初穂……良いのだな……?』

『はい。どうせ先の短い身でございます。皆様に受けた御恩を返せるのなら、私は喜んでお山に参ります』

父の低く呻くような言葉に、初穂はしっかりとした声音で返す。

居並ぶ男たちは、迷いのない初穂の言葉を聞くと再び感嘆の息を零した。

父は長らく思索していた様子だった。その後も、集まった者たちとしばし話し合いを続けていた。

だが、初穂の申し出は、拒絶されることなく受け入れられた。そして、悲痛な決意とある使命を胸に抱いて、山の大神に捧げられる贅となった。

山の祠に『花嫁を捧げたい』と文を捧げると、受諾するという意向があり、贅を送

り出す日が定まった。

『村のために身をもって尽くしてくださいとは……』

『地主様も名誉に思っているだろう。娘の鑑だな』

やがて贅を捧げる宵がやってきて、村の者たちは初穂を見つめつつ呟く。

初穂には、自ら犠牲となりに行く者への餞とでもいうように、贅を尽くした美しい花嫁衣裳が用意された。

別れを惜しむように取り囲む者たちに、初穂はそっと淡い笑みを返すのみ。

美しいと目を細める者の中には、そっと目頭を押さえる者もあった。

嘆き悲しむ人々に見送られながら、初穂は生まれ育った村を後にする。

初穂は気づいていた。

駕籠に乗せられ出立する初穂を見て「おいたわしい」と呟く皆の表情に、安堵と共

にどこか「当然だ」と言わんばかりの醒めた色があったことに――

そして、初穂は山の祠に置き去りにされ、大蛇が現れるのを待つ。

恐怖と、怒りと憎悪とに震えそうになる身体を、自分には使命があるのだと必死に

落ち着かせながら。

もしも喰われるとしてもそれだけは、と唇を噛みしめながら、やがて来る時を待ち

続けた。

だが、そんな初穂の悲痛な覚悟とは裏腹に、現れた大蛇は初穂を見てうれしそうに『花嫁さん』と満面の笑みを浮かべたのである……

## 第二章 山の大蛇

目を見開いたまま凍りついてしまった初穂に気づくと、青年の顔に狼狽の色が浮かぶ。そして慌てた様子で初穂の前に膝をつき、目線を合わせた。

「怖がらせてしまつてすみません。私も、お嫁さんを迎えるということに緊張して……。準備にも手間取つてしまつて……」

待たせてしまいましたよね、と問うように首を傾げ、困つたように笑う青年を見て、初穂は茫然としていた。

お嫁さん。

その言葉を心の裡にて反芻しながら、初穂はなんとか言葉を返そうとする。

人間側は怒りを鎮め、村への災いをおさめてもらうため、あくまで花嫁という名の贄を差し出したはずだった。

だが、目の前の青年からは怒りなどといった負の感情を感じない。

そこにあるのは、恥じらいと喜びといったもの。まるで、人生の晴れの日、それこそ、祝言の日の花婿のような様子である。

(まさか……文字通り嫁にするつもりなの……?)

花嫁を捧げるといふ文を見て、本当に嫁取りをする心持ちでいたのだろうか。村が捧げる贄を、人間の娘を妻として迎えるつもりで……?

初穂の脳裏を、忙しいまでに数多の考えが駆け巡る。

あやかしの言う『嫁』とは、人間の言うそれとは違う意味を持つのでは。

(あるいは油断させておいて……ということも……?)

ありとあらゆる可能性が巡り巡るけれど、何一つ明確な形にならない。

怯えの色を見せないようにと気を張りながら、初穂はもう一度青年を見上げる。

戸惑いを滲ませながら初穂を見つめる彼は、やはり精巧な人形のように美しい。

瞳の独特な虹彩と肌に点在する蛇の鱗が、青年を間違ひなく人ならざる者であると告げている。周囲に吹き抜けたただならぬ風も、その証であると思う。

だが当のあやかしたる青年は、手を初穂に差し出そうとしながら、ためらっているようだった。

どうしたのだらうと思ったものの、自分を覗き込む宝玉のような紅い瞳を感じて、弾かれたように視線を逸らしてしまふ。

人とは思えぬ美貌の青年の瞳に自分が映っているのを見て、そのような状況ではないというのに胸の鼓動が速まつてしまつたから。

今まで誰からも向けられたことのない、気遣いと慈しみに満ちた眼差しに、病の時は違う胸の苦しさを感じた。

しかし、初穂は次の瞬間我に返る。自分の懐にあるものを意識しながら、唇を噛みしめる。

忘れてはならない、大事な使命があるのだ。我が身と引き換えにしても果たさねばならない、大事な、大事な……

「ええと、……初穂さん、でしたか」

「は、はい！」

不意にかけられた声に、初穂の肩が大きく跳ねた。

咄嗟に返せたものの、明らかに声が上がってしまっている。

胸元を押さえ我が身を抱え込む初穂を見て、青年は少しばかり表情を曇らせる。

今度こそ気分を損ねてしまったか、という不安が初穂の胸を過る。

「触れても構いませんか？」

一呼吸おいてかけられた言葉はとても意外なものだった。

「え……？」

初穂は恐る恐るもう一度白銀の鱗を持つ青年を見上げる。

そこにはやや哀しげで、拒絶を恐れるような不安そうな眼差しがあった。今度戸惑うのは初穂のほうだった。

青年が山のあやかし、力を持つ大蛇であるのは間違いない。

対して、初穂は彼に捧げられた贅。あの村を出た段階でこの身は村のものでも、初穂のものでもない。

それなのに、初穂に触れるのに許可を求め、拒まれるのを恐れている。なぜ、と思う初穂に向けて、青年は苦笑しつつ続ける。

「私に触られるのを恐れてらっしゃる様子だから……」

初穂は、思わず目を見開いてしまう。恐れないと言えば嘘になるが、初穂がとった行動の理由は別にある。

だが青年は、初穂が彼の手を恐れていると受け取ったのだろう。相手を怖がらせないようにという配慮があるのは疑いなくて、初穂はさらに戸惑う。

でも、言葉を返さないうままではいられない。

初穂が沈黙を貫く限り、青年は初穂の言葉を待ち続け、差し出した手をそれ以上進めないだろう。

焦るほどに言葉を紡げない。その代わりに、必死に首を左右に振って青年の懸念を否定しようとする。

なぜか、そんな哀しい顔をしないでほしいと思ってしまう。相手は恐ろしい山のあやかしのはずなのに。

自分の心が、自分でもよく分からない。

初穂は伸ばされた手に恐る恐るそっと白い手を差し出した。

指先が触れた瞬間、あたたかい、と感じる。

彼が蛇であるならば触れる肌はきつと冷たいものと思っていたけれど、その手は温かく、優しい。

触れた場所から熱が全身に拡がっていくような気がする。酷く寒い心持ちがして強張っていた身体が解れていく。

頬がなぜか熱い気がして、なんとも言い難い気持ちだった。けれど、それは決して不快ではない。

蛇の青年は破顔しながら、初穂の手をまるで壊れ物でも扱うかのようにそっと握ると、静かにゆっくりと立ち上がらせる。

そして初穂の装束についた埃を丁寧にはらい、裾の皺など整えながら控えめに微笑んだ。

「このような場所で話し込むのもなんですから。まずは、参りましょう」  
どこへ、と口にしかけて止めた。

この青年は人ではない。ならば、人ではないものの世界……あやかしの住处に連れて行かれるのだろうか。

初穂はなぜか大人しく領いていた。

連れて行くと言われればそれに従うし、喰うと言われても抵抗できない。相手が告げることを拒む理由も、術もないのだ。

（私には『使命』があるのに……）

そう告げる声があるのに、身体がその通りに動いてくれない。己の心とそれに反する行動に困惑する初穂の前で、青年は手を前方に翳した。

眩い光が薄暗い祠の中を駆け抜けたかと思うと、手のひらの先に光の線で描いたような不思議な扉が現れる。

青年は初穂の手をそっと引きながら、躊躇うことなく扉のほうへ踏み出した。初穂もそれに続く。

進みゆくにつれて、緩やかに開いていく扉の隙間から眩い光が零れて、初穂は思わず目を瞑ってしまふ。

引いてくれる手を導きとして、初穂は緊張した面持ちで青年に続いて光の中に足を踏み入れて。

次に目を開けたとき、目の前の風景は一変していた。

思わず、目を見開いて言葉を失った。目に映るものが現実とは思えなくて、ついつい我が目を疑ってしまった。

実はもう喰らわれてしまって、自分は浄土に辿り着いたのではないか、と思ったほどだ。

初穂の目の前にあったのは、あまりに美しい光景だった。

春の花の隣で秋の花が咲き、夏の樹々の翠に静かに冬の白雪がはらりと降り積もる。

四季の彩を一度に集めた千朶万朶に、行き交う仄かな光は蛍だろうか。

築地も門も冴えた月の光を受け静かな輝きを放つ、物語絵に出てくる御殿のようなたたずまいの屋敷。

頬を抓って現実か確かめたくなるほどの風景に、初穂は見惚れてしまった。

これが恐ろしい山の化の住まいなの、と信じられない気持ちで身動きできずにいると、耳に柔らかな響きが触れた。

「改めまして。ようこそ、初穂さん」

青年は、初穂に真っ直ぐ向き直ると、柔らかな笑みを見せた。

「私の名は玖澄。この屋敷の主で……見ての通り、この山に住まう蛇のあやかしです」

まるで姫君に対するような恭しい態度で、蛇のあやかし——玖澄は礼をとった。

壊れ物を扱うような丁寧な様子で、大切な宝に触れるような、優しい仕草で。

何かが違う、と初穂の心の裡は揺れに揺れていた。

けれども初穂は、それをいやだ、とは感じなかった。

## 第三章 嫁御寮

玖澄に案内され、屋敷に足を踏み入れた初穂は、やはり自分は既に浄土じやうどにいるのではないかと、と目を見張った。

生まれてこの方、初穂は嘉川の屋敷の奥座敷で育った。一帯の地主としての面子めんじやうがある故か、屋敷は寒村には不釣り合いなほど贅を凝らした造りではあったと思う。

父は帝都を嫌い、外界からの人の出入りを毛嫌いしていたが、それに反して美術品や工芸品を金に飽かせて集めては屋敷中に飾っていた。

少し前から特にそれが顕著けんちやくになり、屋敷にはきらきらしい品々が並ぶようになっていた。

お城のように、と女中は言っていたが、初穂にとつてそれらはどこかちぐはぐで、行き過ぎたものであるように思えて、いつも落ち着かなかった。

玖澄の屋敷に足を踏み入れて、比べてみて気づく。

嘉川の屋敷はあまりに華美であり、また『俄作りの贅』だったと。

この屋敷もまた、贅を尽くしたものと言える。

けれど、巡る梁はり一本、支える柱一本とつても、置かれている調度の一つにしても、そこにあるものが自然に調和しあい、流れるような、ゆつたりとした空気を醸し出している。

たしかに歴史を経た、時を積み重ね磨かれた贅だと感じる。

学や教養があるわけではないから、どうこうと詳しく説明できるわけではないが、初穂はこの屋敷の一つ一つが織りなす空気を好ましいと思った。

ついつい見惚れて周囲を見回してしまつて、ふと気づく。

玖澄が足を止めてこちらを見ているではないか。

浮かれたようにあれこれ見ていた初穂に優しい眼差しを向けたまま、少し離れた前方にて佇んでいる。

人様の住居を不躰ぶたつに見ていただけでなく、先に行く相手の足まで止めさせてしまいい初穂は慌てる。

「も、申し訳ありません……！ つい、お屋敷に見惚れてしまつて……」

謝罪を口にしたが、開いてしまった距離を縮めるべく一歩踏み出そうとしたとき、何か聞こえた気がした。気のせいかと思つてゆるゆると頭を振つてみたものの、やはり聞こえる。

『およめさま、およめさま』

小さな子どものような声が聞こえる。

「今、何か聞こえたような……。子ども……。？」

我知らず、呟いていた。

(今のは、一体……。?)

怪訝に思いながらも一度見回してみても、ふわふわと浮くいくつもの小さな影を見つめる。

一つ一つの影は人に似た形をしていて、可愛らしい衣を纏っている。それは、まるで小さな人形が動いているよう。

小さな影が歌うように囁きながら、初穂の周りをくるくると踊っている。子どもがはしゃぐようにも、喜んでるようにも見えるのだが……

初穂が戸惑いながらも動く影を目で追っていると、玖澄のものより少しばかり高い声が聞こえてくる。

「この山の精霊たちです。小霊と呼ばれています」

驚いて声のしたほうを見ると、そこには人影がまた一つ増えていた。

浮く影のようなふわりとしたものではなく、たしかに人の形をしている。

着ている着物からすれば少年、であるのだろうか、線の細い少女のようにも見える。性別が曖昧に見えることも相まって、尚更不思議な美しさを醸し出していた。

白雪のような髪の少年は、笑みを浮かべながら口を開く。

「小霊たちは、単体ではあまりに儂い存在。力を持つあやかしの側にいることで姿を安定させ、永らえるのです」

「白妙」

玖澄は少年に気づくと、表情を緩めた。

白妙と呼ばれた少年は、初穂の前に進み出ると恭しく礼をして見せる。

「ようこそいらっしやいました、嫁御寮。わたくしは玖澄様にお仕えしております白妙と申します」

「瀬皓の長の娘の、初穂と申します……」

嫁御寮と呼ばれて、あまりに丁寧な物腰で、初穂は戸惑ってしまふ。

玖澄同様に、この白妙という少年もまた、初穂を捧げられた『贅』ではなく迎えるべき『花嫁』として扱っている。

「主に屋敷を仕切ってくれるのが、この白妙です。小霊たちを取りまとめられていきます」

玖澄は白妙に視線を向けてから、穏やかに微笑みつつ口を開いた。屋敷には玖澄と白妙の他に住まう者はおらず、彼らは小霊たちの手を借りて暮らしているらしい。

「実はもう一人いるのですが……。そちらの子は、主に外を飛び回っているので、

帰ってきたときにでも紹介します」

外、とは屋敷の外だろうか。

この美しい屋敷にさりげなく置かれた品々はどれも名人の手によるもの。もう一人は、屋敷と外の世界を繋ぐ役割をしているのではないかと察した。

「それでは、屋敷の中を案内……」

「お待ちください、玖澄様」

玖澄は楽しそうにそう言いながら、初穂を促して歩き始めた。

しかし、釘を刺すように白妙が止める。

玖澄につられて白妙を見ると、彼は半眼の状態で玖澄を見据えていた。

「浮かれて屋敷中を案内して回るつもりだったのでしょうか。うれしいのは分かりますが、嫁御寮のお身体をまず考えてください」

「はい……」

「慣れぬ場所に来たばかり。それで無理をすれば、祝言しゆげんにもこの先の生活にも障りさわが  
出ます。それに、あなたも準備が必要でしょうに」

「その通りです……」

腰に両手を当てながら、幼子に説教をするように滔々たうたうと語る白妙と、うなだれて大人しく聞いている玖澄。

これではどちらが主あるじなのか分からない。

はしゃいでしまつて恥ずかしい、とでも言うように身体を縮めている玖澄は、どう見ても恐ろしいあやかしとは思えず、大人しい青年にしか見えない。

初穂はなんとか戸惑いと疑問を抑えていたものの、そろそろ限界である。

それを見て、初穂が疲れていると受け取ったのか玖澄は慌てたように言う。

「お部屋にご案内します。まずはお休みください。ほうがいいですよ……」

大丈夫ですか？ それまで歩けますか？ と狼狽うろたえる玖澄を見て、初穂の調子はさらに狂う。

獐猛ぢやうちやうな白蛇のあやかしと聞いていた。怒り狂い人を喰らう、恐ろしい大蛇だと。

目の前の青年は、たしかに蛇のあやかしであると名乗り、特徴も蛇のものであるけれど。

(どうなっているの……？ どういう、こと……？)

心配そうな玖澄に導かれ、屋敷の廊下を歩きながら初穂は問い続ける。

山の大蛇が怒り、村に災わざいをもたらしした。故に、自分はその怒りを鎮しずめるために贅えいとして捧たもげられた。

だが、実際じつじに来てみればどうだろう。

玖澄は、花嫁として初穂を丁重に迎え、さらには初穂の様子一つに動揺している。

怒っているようにも、気分で周囲に災いを及ぼすようにも見えない。至って穏やかに優しい……むしろ、いささか気の弱い青年にしか見えない。

花々が零れるように咲き乱れる月下の庭園を臨む渡り廊下の先、用意された部屋に辿り着く。襖を開いて中に招き入れられて中に広がる光景を目にした途端、初穂は完全に言葉を失ってしまった。

日々の暮らしに必要な品々が不足なく揃っているというだけではない。その一つ一つが、あまりに美々しく優雅に整えられている。

襖には見事な物語絵が、うるさく主張しないように描かれている。

そして欄間の木彫り細工も緻密であり、床の間には花を活けた花器に、幽玄な風景が描かれた掛け軸。

配置された調度類は、明かり一つとっても、設えと調和する意匠の装飾が施された逸品である。

目を向けた先に、鏡台があった。

流麗な蒔絵の施された鏡台に、側に置かれた化粧箱も、手鏡や櫛といった小物も同じ意匠で統一されている。

用意されている紅などの化粧品も、何もかもが瀬皓では滅多にお目にかかれないものだった。長の妻である初穂の母ですらとっておきの晴れの日に使うかどうか。

窓からは月の光のもと、四季の花に蜜が行き交う美しい庭園を見渡せる。窓枠が縁となつて一枚の見事な絵のようだ。

あまりの流麗な美しさ、見事さに、圧倒されてしまつて言葉にならない。ましてや、これからここで過ごすなど現実とは思えない。

「ここが、私の、お部屋……?」

「花嫁がいらっしやると聞いて、玖澄様がそれはもう張り切つてお支度なさいました」

呆然とかすれた声音で呟いた初穂に、笑顔の白妙が頷く。

「玖澄様が……?」

初穂は弾かれたように玖澄を見てしまふ。

つまり、この部屋を整えたのは他でもないこの屋敷の主である玖澄ということだ。初穂の視線を向けて、玖澄は苦笑しながら申し訳なさに口を開く。

「今時分、人の女性がどのようなものを好むか分からなくて。もし、気に入らないようなら遠慮なく言ってください」

「い、いえ! そんな、おそれ多い……!」

これほど立派に整えられてもらつたうえで不満など、あるはずがない。初穂は慌てて首を左右に振つて否定する。

そもそも、部屋を用意してもらえないこと自体予想していなかった。初穂は贅だ。贅とは喰らうもの。

すぐに命が潰れる者のために、居心地よく暮らせる部屋を用意する必要などないのに。

玖澄や白妙には、欠片の悪意も、嘘も偽りも感じない。

彼らは純粹に、花嫁として初穂を歓迎してくれている。それが分かるからこそ、初穂の戸惑いは増すばかり。

「しばらくしたら、呼びに参ります。それまでおくつろぎくださいませ。何かご用があれば、小霊たちが控えておりますのでお申しつけください」

「初穂さん……。いえ、それでは、また後で……」

名残惜しそうな様子の玖澄の首根っこを掴まえる白妙。そのまま引きずられるようにしながら、玖澄は初穂を部屋に残して去っていく。

残されたのは、呆然とそれを見送った初穂だけ。

現離れした美しい部屋に一人残された初穂は、糸が切れたようにその場に座り込んだ。

「何が、どうなっているの……?」

気が付いた時には眩いていた。

初穂の心を埋めつくすのは、その問いだけだった。

贅として覚悟を決めて向かった祠に現れたのは、蛇のあやかしと名乗る青年。

だが、あやかしであるという玖澄は、初穂をあくまで花嫁として屋敷に迎え入れた。花嫁が不自由なく過ごせるように、自ら支度を整えて。

頭がくらくらとするほど想定していなかったことづくめであり、理解が追いつかない。力が抜けてその場に倒れそうになった初穂だが、ふと表情を険しくする。

いけない、と自らを戒めるために、頭を激しく左右に振る。

「何をするためにここにきたの……」

贅となった本当の目的を思い出せ、と自らを叱咤する。

初穂には、命に代えても果たさなければならぬ役目があるのだ。

それは身と引き換えにしなければならぬ、危険なものである。

だが、元より自分は贅として捧げられた、死んだと同じ。この命の何を惜しむことがあるだろうか。

胸元から、あるものを取り出す。

それは、一振りの短刀だった。

簡素な装飾の刀は、長さこそ花嫁が護身のために持つ懐剣と同じである。

だが、嫁入り道具の一つと称するにはあまりに質素で、そしてどこか重々しい雰囲

気を持つものだった。  
忘れてはならない。

——初穂は、あの大蛇を討つために贅ひんとなったのだから。

#### 第四章 使命

祠ほこらに出立する少し前のこと。

座敷にて初穂と父は向き合って座っていた。

父が人払いをしたため、この場にいるのは二人だけだ。

父の意を図りかねていたところ、父が何かを差し出した。

『これを、お前に託す』

『これは……?』

それは、一振りの短刀だった。

花嫁が嫁入りるときに身に付ける懐剣とも思ったが、なぜか『違う』と感じる。

武骨で飾り気のないこの短刀は、およそ花嫁にふさわしいとは言えぬ品であり、重  
苦しい空気を纏まとっている。

『あやかしを消し去る祝福が籠められた刀だ。……その短刀にて、あやかしを討うて』  
父の言葉に、初穂は目を見開いて絶句する。

この短刀は、あやかしに対しては致命的な一撃を与えられるものと、父は言う。なぜ、そのようなものを父が持っているのか気になるが、それ以上に気になるのは父の言わんとすることである。

自分は今から、あやかしに許しを乞うための贄として……あやかしに喰らわれるために捧げられるのだ。

だが、父は明らかにそれとは違う意向を示している。

『贄を与えたところで村が救われる保証はないのだ。あやかしの懐に入り込み、心の臓に突き立ててやれ』

父は重々しくそう告げた。

たしかに、大蛇が贄に満足して村を祟るのを止めてくれるという保証はない。

人とあやかしの理は違うはず。そもそもその価値観が違う相手に、対等な取引を考えるのは危うい。

そう、災いを確実に払いたいなら、村を苦しめる憎き元凶を消し去るより他はない。

この、人よりも虚弱な身でそれが叶うだろうかと、蒼褪めた初穂が息を飲んだ瞬間だった。

『そして、あやかしを見事に討ち果たして、戻ってくるがいい』

短刀を見つめていた初穂は、弾かれたように父を見る。

重々しい言葉と表情の父は、大きく息を吐くと、さらに続けた。

『いかに嫁げぬ娘であつても大事な娘であることは変わらない。あやかしの贄にむざむざ捧げたくない』

初穂は唇を噛みしめる。

父の言葉が、痛いほど胸に響いた。

大事な娘、と父は言ってくれたのだ。

なんの役にも立てない、そればかりか人の手を煩わせてばかりの初穂を、見捨てず育ててくれた。

妹たちのように嫁げないとしても、せめて最後までこの家で穏やかに過ごせと言ってくれた。

父の心遣いに、ただただ申し訳なきが募った。

だからこそ初穂は、人の情けがなければ命を繋げないと自覚してきた。

常に謙虚に、持ち得るすべてで人に尽くし、分け与え、感謝するようにと自らに命じていた。

瀬暗の長の娘として、父の娘として、与えられた情に恥ずかしくない在り方を心掛けたかと思っていた。

戸惑いと、縋るような光を宿して見つめる初穂に、父は静かに言う。

『だから、必ずあやかしを討ち、戻るのが。良いな』  
重ねて言われた帰還を望むという言葉に、初穂はうつむき、静かに短刀に手を伸ばす。

そのまま両手で胸元に抱くように握りしめ一呼吸おいた後、決意の籠った声音でようやく答えを紡いだ。

『ありがとうございます、お父様。初穂は、必ず使命を果たして参ります』  
役に立たない身だと、物の数に入らぬ、価値のない身だと思っていた。  
けれど、父のためにできることがあるならば。

戻ってこい。

思わぬ父の言葉に、形容しがたい思いが胸に抜がり、短刀を握る手に力が籠る。

初穂はそのとき固く誓ったのだ。

生きて帰ることが叶わなくとも。命を引き換えることになろうとも必ず、使命を果たして見せると――

懐に覚悟の刃を秘めた初穂が、ひたすら唇を引き結び耐えるようにして待っていると、やがて白妙が迎えにきた。

導かれた先は、主にとって大事な儀式の……祝言のために整えられた広間。

浮かび上がる幻想的な光は焰かと思ったが、不可思議の力によって灯る明かりで、場を美しく彩る。

敷かれた毛氈が、置かれた屏風が、灯りを受けて仄かに煌めく。

(きれい……)

心の中で思わず呟いてしまった初穂の眼差しの向こうで、小霊たちが寿ぐように舞い踊りながら示す先、正装に身を包んだ玖澄が待っている。

先程の情けない様子はなりを潜めた、凛々しい花婿の姿だった。

ただ、その端整な面にあるのは穏やかな慈しみの光で、初穂は思わずうつむいてしまふ。

玖澄の眼差しが温かければ温かいだけ、心のどこかが棘を刺されたように痛む。  
(大蛇は、災いの源で。……憎むべき相手のはずなのに)

村人を苦しめ、父を悩ませ、この大蛇さえいなければ初穂は贅とならず、終わりを迎える日まで静かにあの家で暮らせたはず。

初穂にとって、仇敵でしかない。

それなのに目の前の青年は、思い描いていた姿とはかけ離れた優しい眼差しで初穂を見るのだ。

少しだけ苦笑して見守っている玖澄を見て、初穂は懐を重く感じた。

花の燭が灯る幽玄な広間で、玖澄と初穂の祝言はつつがなく行われる。とはいっても、立会人として白妙、参列者は小霊たちだけで。

「身内ばかりのささやかなもので、申し訳ありません……」

玖澄は申し訳なげに初穂に詫びたが、初穂は盛大な式と言われても気後れしただろうから、むしろこれで良かったと思っている。

人ならざる花婿との三々九度など、現のものとは思えず、ふわふわと夢心地であつた。

（現実と思えなくても、仕方ないわ……）

背負う使命を考えると、この祝言は仮初のものではないのだから、と初穂は心の裡で苦い呟きを零した。

そう、初穂は玖澄を討つためにここに来たのだ。

隙を窺い、懐に刃を突き立てるために。

しかし、祝言の間、隙と思える機会は巡ってこなかった。

どうせなら、祠で二人きりだった際に思い切っていれば良かった。そう思ってもう遅い。

祝言の場では、白妙に加えて小霊たちの目があつたし、初穂自身が場を包み込むような夢幻の雰囲気飲まれてしまっていた。

ならば、二人になる時間を待つしかない。

——それは、存外早く訪れる。

花嫁の装束から簡素な寝衣に着替えた初穂は、強張つた面持ちで敷かれた床の前に座していた。

祝言が終わつたのであれば、これからあるのはただ一つ。

初夜の床である。

このときは、さすがに白妙も小霊たちも姿を消し二人きりとなる。

（私が、祝言をあげる日がくるなんて……）

ましてや相手が人ではないとは、もちろん予想しなかった。

（この後は、その……。でも、私は何も教えられていなくて……）

この後のことを考えても、およそしか分らない。嫁ぐ予定のあつた妹たちのような教えは受けていない。

ただ、妹たちが男性の目を避けるようにしながら話しているのを、時折耳にするくらいだった。

知らないというのは恐怖であり、気を抜けば身体に震えが走りそうになる。ただただ恐ろしいけれど、玖澄が無体を働くようには思えなくて。

うれしそうに微笑んでいた蛇の青年の様子を思い浮かべると、不思議と震えが止まる。

なぜ、と自分に問う。

先程会ったばかりなのに。

相手は、恐ろしい大蛇のあやかしであるというのに。

そして、自分は彼を討たねばならないのに……

「今日はお疲れでしょうから。ゆっくり休んでくださいね」

だが、初穂の懊悩とは裏腹に、姿を現した玖澄はこう言ったのだ。

(初夜、とはそういうものの……?)

いかに何も教えられていないと言っても、さすがにそれは違う、と初穂にも分かった。

動揺を表に出さないようにと気をつけたが、無理だった。

どうやら、なんとも言えない表情を浮かべてしまったようで、玖澄は初穂の顔を見て苦笑すると、気遣うように優しい声音で続けた。

「初穂さんの身体が第一ですから。また、明日」

無理強いをしたくない、と玖澄は微笑んだ。

まだ顔を合わせたばかりで、初穂はこの屋敷に来たばかり。

お互いを知らないし、環境に慣れてもないから、と言う玖澄に初穂は返す言葉がない。

玖澄は、夜は冷えるから、と自らが羽織っていた羽織を初穂の肩にかけ、次いで、おやすみなさい、と残して静かに部屋を辞した。

残された初穂は、まとも呆然と座り込んでいた。

「私は、どうしたらいいの……?」

初夜の床に置き去りにされるといふのは、なんととはなしに女性として複雑なものがある。

だが、どこかで安堵していた。

何に安堵しているのか。

あやかしと契らずに済んだことか。

それともまさか、懐の短刀を使わずに済んだことか。

まとも使命を果たす機会を逃してしまったことを悔いても、もう遅い。既に玖澄は去ってしまった。

再び二人きりになる時はいつ訪れるだろうか。

初穂にとっての好機は、次はいつ。

温もり残る羽織にそっと触れながら、初穂の瞳には複雑な感情が宿っていた。

玖澄は、なぜあんなにも捧げられた贅えいに対して、本来であれば喰らうはずの初穂に優しいのだろう。

ただただ優しく気遣い。

初穂の身体を、意思を尊重して。

家族より、村人より、よほど初穂のことを……

そこまで考えて、首を左右にゆるゆると振ると、初穂は窓辺に歩み寄る。

窓外には白々と照らす月がある。

物憂げな表情でそれを見上げながら、初穂は心の裡うらで呟つぶやいた。

(……『また明日』、って言っていたじゃない)

日々は続く。

玖澄と共に過ごす時間が終わったのではない。

始まったのだと。

いつの日かを、思うことができるのだと……

枕の下に隠していた短刀を取り出して、手に取る。

いつか、自分はこの刀で玖澄を刺し貫く。

この刀で、玖澄を討うつ。

必ず、課せられた使命を果たし……父の期待に応えるのだ。

それが、初穂を駆り立てる原動力であった。

それなのに、なぜか。

短刀を見つめる初穂の顔は、我知らず辛そうに歪ゆがんでいた。

## 第五章 不思議な屋敷の、新しき日々

祝言しゅうげんの翌朝から、仮初かりはじめの夫婦生活は始まった。

小霊せうれいたちが手伝ってくれるというので手を借りて朝の身支度を整えていると、白妙びやくめうが朝餉あさけの支度ができたと呼びにきた。

(どんな顔をすれば良いのかしら……)

昨夜の出来事を考えると、やや固い面持ちになっってしまう初穂ではあったが、それは対照的に玖澄は晴れやかな笑みを浮かべていた。

整えられた膳ぜんには、実においしそうな汁や菜、それに白いご飯がある。

ゆらりと湯気ゆげが上がっているところからして、温かいのはたしかだ。

日頃初穂は、自分は後回しでいいから、と遠慮するようにしていた。だから、家人かじんがそれぞれに食べた後の冷えた汁や菜に慣れてしまっていた。

温かい食事というのはいつぶりだろうと目を細める。

召し上がれ、という言葉を受けて我に返り手を合わせ、箸はしを手に取り食べ始める。

「おいしいです……」

気がつくくと、素直に口に出していた。

手にした器から伝わる温かさや、どこか懐かしさを感じさせる味付けに、身体の強張りはりが解れていく。

両手で碗わんを持ちながら、初穂は自分では気づかぬままに無防備な表情を浮かべる。

それを見て、玖澄がうれしそうに微笑んだ。

「良かった。作っている最中も、お口に合うかどうか心配で、心配で。でも、そう言っただけだったので安心しました」

とてもおいしいです、と続けかけた初穂は、ふと動きを止める。

今、聞き逃してはいけない言葉が聞こえた気がする。言われた言葉を何度か脳裏で繰り返して、その理由について考えた結論として。

「……玖澄様が、お料理を？」

「初穂さんに食べていただくものだから、自分の手で作りたくて」

はにかむように笑いながら言われた言葉を、初穂はなかなか理解できなかった。

そもそも、初穂の中では食事の支度は女性が行うもので、男性は台所に入りすらないのが普通である。

この素晴らしい屋敷あそびの主であり男性である玖澄が、女性である初穂のために食膳を整えたというのが俄かに信じがたい。